●ワンポイントレッスン●

衝撃咬頭干渉法

通常、人間が咀嚼をするとき、正中から食物が入ってきても、舌の運搬によって左右どちらかの第一(主)咀嚼側に限定されます。姿勢や生活様式によって第一咀嚼側は、若干変化することがありますが、本来、成長の過程や長い間の習慣という大きな因子によって決定されます。この第一咀嚼側を知る方法が衝撃咬頭干渉法です。具体的なやり方は、顎自然位（接牙していない5～6°の開口位）で、下顎正中、つまりオトガイの下部を打検器もしくは手指で下から上に軽く叩打します(写真参照)。叩打すると下顎の歯牙が上顎歯に端接触しますが、このとき被験者にどの歯が最初に当たったかを聞きます。左側の歯であれば、この被験者の第一咀嚼側は左ということになります。ただし、反対咬合うけぐちの場合は、このようにならない場合があることに留意してください。

第一咀嚼側を知ることは、構造医学では重要な診断のポイントになります。第一咀嚼側が右であれば、RC3-Pで顎関節頸椎協調支点の 右側が偏位側ということになり、その上位ではAXLPという問題を引き起こしていることになります。さらに、頭蓋・顔面部で将来起こりうる問題を概ね予測することができます。

また、第一咀嚼側は神経学的にも重要な診断点になります。食物を食べる前に、空腹感、視覚、嗅覚などによって神経系が咀嚼、嚥下、消化という食べる準備をするわけですが、たとえば、口蓋垂は嚥下の際に第一咀嚼側に傾いて、食物が食道を通過できる大きさかどうかをチェックするセンサーのはたらきをします。こうした神経系の連携プレイがうまくいっているかどうかをみることは、診断の重要な手続きになります。

（日本構造医学研究所）

①顎自然位でオトガイの下部を下から上に叩打する。

▼

②

③最初に端接触した側が第一咀嚼側。（写真は左側）